第 12 回合評会へのコメント

馬場智一著『倫理の他者—レヴィナスにおける異教概念』へのコメント（抜粋）

小野文生（同志社大学グローバル地域文化学部准教授）

■馬場さんの問題設定

（1）レヴィナス哲学におけるパガニスム、異教概念を問う

【質問】異教概念の生成は、「批判」として生成してきたことには、どのような問題が含まれているか（「異なる」ことが即批判の対象となるわけではないか、それが批判の対象とされてきたこと）。「誤った信仰」への批判、のみならず、風景的なもの、農民的なもの、地方的なものへの批判、「異なるのもの」への批判として。つねに、一方から他方への。その批判の構成を問うことは、批判される対象の構成プロセスを問うこと（他者表象のポリティクス）につながると思うが、はたして、レヴィナスにとってパガヌス（異教徒）は顔を持っていたか。

（2）「ユダヤ・キリスト教的西欧」や「西洋」哲学から除外されているという事実。

これをどう理解するかという馬場さんの問題意識。

・レヴィナスにおける異教理解の推移：

30 年代・・・ナチズム批判、ハイデッガー批判としての異教批判

『全体性と無限』・・・否定的でもあり肯定的でもあるという両義性

『全体性と無限』以降・・・たんに否定的、土地への根付きとしての異教

■パガニスム初出テクスト「マイモニデスの現代性」（1935 年）をめぐって

【質問】レヴィナスの「マイモニデスの現代性」におけるパガニスム理解は、一方で「野蛮」と結びつくことで従来の伝統的なパガニスム概念を踏襲しているだけのようにもみえる。しかし他方で、「異教とは世界の外に出る能力を根本的に欠くこと」という独自の規定は、「田舎性」や「土着性」や「文民性」から直接導き出せるものではない。

■「存在論的異教論」「存在論的ユダヤ教論」「存在論的キリスト教西欧論」という三つの文明論的範疇の相互連関を明らかにしながら哲学的思考を関連付ける作業（328）

■「非場所としての住居の消失」（「パガニスムの危険の消失」＝「享受の両義性の喪失」）

【質問】「両義性」への評価について：

異教の両義性、あるいは享受というものがもっていた両義性を、馬場さんはどう評価するのか。

「異教の他者である倫理の内部に、倫理の他者としての異教の危険がはらまれている」（398）

※この馬場さんのフレーズは本書にとって核心的。レヴィナスが前提としている「異教 vs 倫理」という構図が崩れていく地点をレヴィナスのなかに読み解く試みであるように思われる。